

秋田の宝・おらほの宝ー地域の文化遺産発見ー事業
お宝発見ハンドブック ～工芸技術編～

あきたの工芸



秋田県教育委員会

はじめに

秋田県には、長い伝統の中で継承されてきたたくさんの工芸技術があります。

工芸技術は文化財の分類では無形文化財とされ、人々の生活や地域に根ざした素朴なものから日常の器を芸術にまで昇華させたものなど、職人の手から手へ、心から心へと受け継がれてきている貴重な文化遺産です。

県教育委員会では、県内の文化遺産の所在とその現状を調査し報告することによって、多くの方々にその価値を発見してもらうとともに、広く保存や活用を図るために、平成16年度から「秋田の宝おらほの宝ー地域の文化遺産発見ー事業」を実施しています。今年度は工芸技術を対象にしました。

本書は今回の調査をまとめたもので、県内のおもな工芸技術を紹介するとともに、ひとつの器や道具ができるまでの工程を記録しています。

本書によって、秋田の工芸のすばらしさや手仕事の魅力、道具に込められた職人の思いを感じていただき、使い捨てるの現代において、手づくりのものの美しさ、あたたかさが見直されるきっかけになれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査への協力を御快諾いただき、貴重な時間を割いてくださった職人の皆様と調査委員及び調査員の方々にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

平成19年3月

秋田県教育委員会

例 言

- 1 本書は、平成18年度秋田の宝おらほの宝ー地域の文化遺産発見ー事業に係る刊行物である。
- 2 本事業にあたっては、学識経験者及び調査事項について専門知識を有する者による工芸技術調査委員会を組織した。
- 3 工芸技術調査及び工芸技術調査委員会の期日については次のとおりである。
 - (1) 調査期間 平成18年6月から平成19年3月
 - (2) 委員会の開催期日

期 日	事 項	内 容 等
6月23日(金)	第1回工芸技術調査委員会 (秋田県庁71会議室)	調査対象検討、調査方法及び調査の分担について
7月中旬～	工芸技術調査	
11月16日(木)	第2回工芸技術調査委員会 (秋田県庁第二庁舎51会議室)	調査の中間報告、報告書の内容と執筆分担について
3月16日(金)	第3回工芸技術調査委員会 (秋田県庁第二庁舎53会議室)	調査の報告、県内の工芸技術の現況等について
3月末日	報告書刊行	
平成19年度	現地研修会(予定)	

- 4 本書に掲載されている写真は、調査担当者の撮影によるものと調査協力者から提供を受けたものである。
- 5 調査協力者の叙勲受章等については、すべて割愛させていただいた。
- 6 本書の春慶塗は、「秋田県文化財調査報告書第105集 秋田の工芸技術」(昭和58年、秋田県教育委員会)から転載したものである。また、白岩焼については、文献調査を中心に執筆した。
- 7 本書の編集は、秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室が行った。

目

次

工芸技術調査委員会調査委員及び調査員	2
調査物件及び調査協力者	2

I. 秋田の工芸の特色

秋田の工芸の特色	4
----------------	---

II. あきたの工芸

1 あきたの漆芸	7
①川連漆器 ②春慶塗 ③生駒塗 コラム「あきたの漆芸」	
2 あきたの木竹工	28
①榊細工 ②大館曲げわっぱ ③秋田杉桶樽 ④イタヤ細工 ⑤あけびづる細工 ⑥十文字の竹細工 ⑦組子細工 ⑧曲木家具	
3 あきたの染織	95
①浅舞藍染 ②正藍浅舞絞 ③秋田落摺 ④天鷲織（ぜんまい白鳥織）	
4 あきたの金工	125
①秋田銀線細工 ②杢目銅 ③打刃物 コラム「あきたの金工」	
5 あきたの陶芸	145
①楢岡焼 ②秋田焼 ③白岩焼	
6 あきたの郷土玩具	163
①八橋人形 ②中山人形 ③伝統こけし	
7 その他の工芸技術	186
①男鹿石細工 ②十文字和紙 ③和紙漉	
8 秋田県指定無形文化財	206
①秋田八丈 ②鹿角紫根染・茜染	

III. 資料

事業要項	223
無形文化財について	228

工芸技術調査委員会調査委員及び調査員

調査委員

	所 属	担当分野
柳 橋 眞	金沢美術工芸大学大学院専任教授 石川県輪島漆芸美術館館長	委員長（調査総括）
平 野 庫太郎	秋田公立美術工芸短期大学教授	金工、陶芸ほか
宮 本 康 男	秋田県立博物館主任専門員	染織ほか

調 査 員

	所 属	担当分野
三 浦 正 宏	海青舎代表、秋田手仕事研究会主宰	木竹工、郷土玩具 ほか
中 田 達 男	仙北市角館樺細工伝承館館長	木竹工ほか
佐々木 伸	湯沢市農林課農山村整備班参事兼班長	木竹工
高 橋 輝 樹	男鹿市立男鹿東中学校教諭	木竹工
佐 藤 俊 正	秋田県産業経済政策課活き活き物産応援 チームチームリーダー	

調査物件及び調査協力者

	調 査 物 件	氏 名	法 人 名 等	所 在 地	調 査 担 当 者
漆 芸					
1	川連漆器	佐藤 利雄	秋田県漆器工業協同組合 利山	湯沢市	佐々木
		生駒 歌子 伊藤 貢	生駒漆芸工房		
2	生駒塗			秋田市	宮本

木竹工

3	樺細工	大橋 忠		仙北市	中田
		高橋 正美			
		福井 正人			
		三浦 勇			
4	大館曲げわっぱ	栗盛 俊二	有限会社栗久	大館市	高橋
		三ッ倉和雄	(株)大館工芸社		
		高橋 清一	曲げわっぱ高久		
5	秋田杉桶樽	畠 次郎	能代製樽所	能代市	
		鎌田 勇平	(有)樽富かまた		
6	イタヤ細工	佐藤 定雄		仙北市	中田
		佐藤 智香			
		本庄あずさ		秋田市	
		加藤 勝衛			
7	あけびづる細工	中川原信一		横手市	三浦
8	十文字の竹細工	佐藤 正行	佐藤竹材店	横手市	

	調査物件	氏名	法人名等	所在地	調査担当者
9	組子細工	渡辺 福蔵	渡辺指物店	能代市	高橋
		小高 重光	小高建具製作所	由利本荘市	宮本
		大橋 利一	大橋木工	横手市	
10	曲木家具		秋田木工(株)	湯沢市	佐々木

染 織

11	浅舞藍染	釜田 重子	釜田染屋	横手市	宮本
12	正藍浅舞絞	伊勢 哲郎	正藍浅舞絞保存会 (横手市平鹿農村文化伝承館内)	横手市	
		佐野 洋子			
		千葉 昭子			
		堀田アイ子			
13	秋田落摺	宮越尚一郎		秋田市	
14	天鷲織 (ぜんまい白鳥織)	高野 利津	史跡保存伝承の里天鷲村	由利本荘市	
		山崎 智子			

金 工

15	秋田銀線細工	進藤 春雄	金・銀線工房しんどう	秋田市	平野
		須藤 至	銀線細工すとう	横手市	
		阿部 武	阿部工房	秋田市	
16	杓目銅	根田雄一郎		秋田市	平野
		林 美光			
		千貝 弘	千貝工房		
17	打刃物	長沼 兼廣	兼廣刃物工場	秋田市	

陶 芸

18	榎岡焼	小松 哲郎	榎岡陶苑	大仙市	平野
19	秋田焼	三浦銀一郎		秋田市	

郷土玩具

20	八橋人形	道川 トモ	道川土人形店	秋田市	三浦
21	中山人形	樋渡 徹	樋渡人形店	横手市	
22	伝統こけし	小野寺正徳	川連こけし工人会	湯沢市	佐々木

その他の工芸技術

23	男鹿石細工	吉田 順作	(株)寒風	男鹿市	三浦
		安田 俊彰			
		江畑 勇人			
		武藤 実			
		高桑 剛			
24	和紙漉	佐々木清男		横手市	
		泉川 祐子			
		渡辺 弘子			

I 秋田の工芸の特色

秋田の工芸の特色

金沢美術工芸大学大学院専任教授

石川県輪島漆芸美術館館長

柳 橋 眞

誰のための工芸か

秋田の工芸の特色を直裁に、端的に知る方法の一つとして、川連塗と福島県の会津塗を比較してみよう。

会津は石川県の輪島とともに日本を代表する漆器産地で、明治時代以後、積極的に生産方法の合理化に努め、東京などに販路を拡大させた。たとえば型を用いた鈴木式轆轤ろくろを開発して量産を容易にしたが、こうした改良製法は他産地にも大きな影響を与えた。なお会津塗の木地は、他の産地と同様にトチ、ホオ、カツラなどが多い。

川連塗の木地は本来、ブナであった。秋田の山奥で伐採したブナを筏に組んで、ゆったりと川に流して産地まで運んできたが、その間、ブナの灰あくは十分に川の流れで抜かれて良材として用いられた。もともと炭にするなどブナ材は日本に豊富にあったものだが、他産地では目もくれず、川連塗の目をひく特色となった。この豊かな材料ゆえに、日本で最も安価な漆器として大衆に好まれ、販路は秋田周辺から北海道など東を向いており、西の大都會をめぐす会津塗とはよい対比となっていた。

私の所の輪島塗をはじめ伝統工芸の大多数は僻地で作り、はるばる都会まで持って行って売るのが普通である。作り手は買い手の顔を知らず、生活環境を知らない。経営方針を論議すると「付加価値をつけて、高級品にして売る」という結論にいつも落ち着く。

それに対し川連塗は、作り手と同じ生活環境の人々に日常生活用として安く売る。川連の人にとっては当然のことにみえるだろうが、全体から見ると「一人我が道を行く」姿なのである。現在、漆器産地は北陸と東北地方を中心に形成され、九州や太平洋側には少ない。昔、これらの地方でも盛んに漆器を生産していたが、より効率のよい新しい産業のために消えた。

川連を訪れた北陸の漆器産地の職人は、「川連塗は活気がある」と口をそろえていう。それは川連塗の生産が盛んだという意味もあろうが、なによりも川連塗の人々が生き生きしているということなのである。先日、輪島に川連塗の女性達が訪ねてきて輪島塗の女性達と漆器産業の将来について話し合った。今、産地では女性の勢いが強い。食器の実際の使い手である女性の立場から、新しい発想を出そうと試みているのである。つまり作り手と買い手の生活環境が同じくなり、使い手の顔がはっきり見えて対話が生じ、まさに日常生活のための漆器を作ることが具体的な将来像となりつつある。川連塗の女性達が帰ったのちの輪島の人々の感想も、「川連塗の女性は強い、活気がある」だった。

川連塗の木地作りの仕事場を訪ねると、轆轤ひきもので挽物をひいた後、すぐに脇の机で指物さしものを始めたのに驚いた。他の漆器産地では分業がすすみ、挽物と指物はまったく別の職域となっている。生産率をあげる分業形態からいえば、非能率的な未分化となるが、きめの細かい器形を作るためには挽

物と指物の両方の技術をそなえた職人は貴重な存在である。

かつて川連塗の人が新聞紙上に川連塗の現状を評して、「一周遅れで先頭をきったランナー」と書いたところ、周囲から「古い川連塗」というマイナスイメージを与えると非難されたという。しかし「一周遅れの先頭」という指摘は、作り手側の利益追求から使い手の立場を無視して、金ピカの附加価値を一方的に加工した製品を量産した既成方針が深刻に反省されている現在、本来の誠実で正しい生産のあり方を主張したものとして肯定されるべきものである。庶民の日常生活を適正な価格の美しく楽しい工芸品で豊かなものにする、無上の価値ある人生の現実の生活に工芸が働きかける力を有することは永遠の真理である。秋田の工芸は日本のどこよりもそこに近いといえる。

伝統工芸の鉄則

日本の伝統工芸は自然の素材を扱う。自然の素材は、それが生れ育った所で加工してこそ、最大の能力を発揮する。たとえば家を建てる際、基本となる四本柱は地元の材を切ってきて、その木目を見て、本来の樹木が立っていたと同様に東西南北の向きをそろえて立てて使った時、どんな台風や地震にも耐える丈夫な家が出来。現在は輸入された外材を、木目とは関係なしに画一的な寸法で切って組みたてるため、せっかくの自然材が持つ機能を十分に発揮させることが出来ない。

伝統工芸のどの分野であれ、地元産の素材を原料とし、その素材を知り尽くした地元の職人が使ってこそ、最も美しく、最も強靱な工芸品が出来あがる。これが伝統工芸の鉄則である。

さて、秋田の樺細工(桜皮細工)はとかく地方産のごとく考えられやすいが、本来は正倉院宝物のとうす刀子の精緻で美しい装飾などの名品が示すように、我が国の工芸史の本流に置かれるべき技術である。現在、正倉院宝物の調査や復元模造が行われる中で、漆芸や木工の古典技法を再現する試みが行われているように、樺細工の分野でも若い工人の挑戦が行われるに違いない。その樺細工と同じ角館のイタヤ細工に出会い感激した。

年齢を聞くと驚くような高齢なのだが、若々しい佐藤定雄さんと奥さんの純粋な熱意のあふれた作業、イタヤカエデの白くて柔軟な木肌の他に類例がない独自の魅力、地元産のイタヤカエデと竹を組み合わせて作った美しい造形の農具、これらの地元産の素材を採取する親しい仲間、そして若い後継者と最少限の人数ながら伝統工芸の鉄則に全てが合致して成果をあげている。

私がたまたま偶然、イタヤ細工に出会って感激しているので、地元の人が地元特産の素材の能力を最高度に発揮させている秋田の工芸はまだ数多くあるに違いない。秋田の人々は生れた時から見なれて、生活の中に入っているから当然の姿と判断するのだろうが、全国の状況から見たら、それは奇蹟に近いことなのである。

将来の布石

伝統工芸の分野でも、近年、小学生や中学生などの次世代に伝統工芸への理解や関心を求めて働きかける事業が盛んになってきた。たとえば人間国宝の仕事場に若い彼らが訪ねて話を聞いたり、人間国宝が小学校や中学校に出かけて行って話をするなどの試みである。これは伝統工芸の直接の後継者養成に結びつかなくとも、伝統工芸の愛好者や使い手を育てることを期待しているのである。問題点があるとすれば、知識に終わらせてはならないということである。

今回、秋田県立博物館を訪ねて、最後の部屋の「わくわくたんけん教室」で興味深いものを見た。壁の棚にひとかかえもある大きな「宝箱」が置かれてあって、郷土の工芸品の実物、たとえば焼き物

秋田の工芸の特色

の大きな壺や染織の着物などと共に参考書などが入っていた。直接に手にさわり、着てみたりして、人間の五感から本物を体験させようという試みなのである。作品の提供には職人や作家の協力があったに違はなく、なかなかの力作、大作で十分に大人の鑑賞に耐え得る。さもないことながら盗まれないかと心配になるが、大らかに箱は放置されていた。大切なことは実物に接することから芸術的な感動を与え、生活の喜びに工芸作品が実際に働きかける力を有していることを具体的な体験から感覚を通して教えていることである。工芸の将来の布石としては、秋田のこの努力が正道なのである。

自給の精神

秋田をはじめとして東北の諸県は食料や日常生活の生産が高く、自給率が1を超える。工芸の盛んな京都や石川では技術者が都市部に集中して、日常生活の自給率が低い。一方、秋田は工芸の作り手が県内に広がっている。一か所に集っていないと注目をあびず、知名度が低く軽視される傾向がある。しかし、秋田の人々の生活のあり方が自給の精神にあるということは、工芸のあり方に直結する。もの作りの根が地中に深く広がっていることを意味する。

日本全体の自給率も低くなり、工芸の材料や用具ですら海外に依存することが一般の姿となっている。国が長年、伝統工芸産業の振興に努力してきたが、なかなか成果をあげられない。自然界の資源を大切に、その能力を十二分に生かしたもの作りという自給の精神が忘れ去られているからではないだろうか。

文化庁はもの作りの技(無形文化財)の保護として、次の三通りの施策を用意している。

(1) 重要無形文化財保持者 (いわゆる人間国宝)

専門の技術者で、芸術的にも高い力量を有している。個人ばかりでなく、保存会のような団体も認められる。

(2) 文化財保存技術

伝統工芸を支える道具づくりや原料づくりの人々を認める。

(3) 民俗技術

本格的な専門家ではなく、広く庶民が行う生産技術で、対象は狭い工芸ばかりではなく食料など生活一般の技まで広げられる。

ひと言でいえば、伝統工芸の頂点から周辺の保存技術、庶民のもの作りへと次第に対象を拡大している。それだけ我が国のもの作り技術の危機が広がっているともいえる。

先に述べたように、秋田の工芸は川連塗や樺細工のように産地に発展したものが一方、技術者が一人、ないし一家族という小規模のものも多い。技術の内容、性格、形態もさまざまである。秋田の豊かな風土の中に広く散在しているわけで、この広がりや秋田の工芸の最も重要な特色といえる。文化財行政で用意した、先の三通りではまだ不十分だろうが、なんとか知恵を働かして、一般市民の支援のもとに秋田の工芸を発展させていきたい。